

ゐのはな同窓会報誕生の頃

思い返してみると始まりは不思議な偶然からであった。あれは昭和33年頃だったと思う。そのころ、稲毛にあった医学進学課程の時代からやっていた「碧潮」という学生仲間の同人雑誌が潰れて、碧潮の同人だった末吉貫爾クンと私はちょっとした手持ち無沙汰の中にいた。

そこに同級生の黒田健昭クンが「一緒に医学部の学生新聞を作らないか」という話を持ち込んできた。さて、新聞をやるとなると経費をどうやって賄うかが最初の課題だ。ある程度広告収入でやれるのではないかというのが黒田クンの目論見で、試算してみるとどうやら行けそうだ。彼は顔を合わせるたびに次々とアイデアを語り、新聞作りは動き始めたようにみえた。ところが、それに待ったがかかってしまった。

千葉大学には従来から大学全体の学生が作る「千葉大学新聞」というものがあった。この新聞も広告収入に多分に依存していて、その広告の中には医療に関連のあるものもあったから、もし医学部の学生が新聞を作り、広告集めを始めた場合、千葉大学新聞は広告源を失う可能性がある。認めるわけにはいかない。そういうクレームが付いたのだ。

千葉大学新聞のスタッフと話し合いを持ったりしたが、先方も譲らない。資金がなければ新聞は作れない。ほぼあきらめかけたとき思わぬほうに事態が急転した。

当時、医学部の同窓会からは、「ゐのはな」というB5版くらいの小刷紙が発行されていた。これは、金坂さんというご高齢の同窓会専従職員がお一人で担当し、会員から寄稿された原稿を束ねて、それに表紙を付けたような形式のもので、労作ではあったが情報の発信媒体とはやや異なる性格のものであった。

その頃、ゐのはな同窓会の会長は衛生学の谷川教授だったように記憶しているが、薬理学の小林教授も学内における同窓会の中核でいらっしやった。ちょうど記念講堂の建設計画が持ち上がっていたときで、小林教授は、広く寄付を呼びかけるためにも日本の津々浦々に展開する同窓会員を情報でつなぐ新聞形式の会報がぜひ必要だと考えておいでだった。

どこでどういうはずみになったのか、学生新聞を作りたいが資金がないという私達の話が小林教授の耳に入り、こんな話 came。

「皆さんの若い力に期待して、同窓会報を作ってもらいたいです。もちろん労力だけを提供してもらってはなりません。半分のスペースを同窓会報にして、残りの半分をあなたがた学生さんが自由に使えるスペースにする、そんな新聞を作ってみませんか。制作費は同窓会が負担し、同窓会館の中に編集部の部屋も提供します。また学生さんのために割り当てたスペースには自由に何を書いても結構です」

渡りに船の話に私達がとびつかないわけがない。この新聞は学生だけでなく全国の先輩の手元にも送られるのだ。頓挫しかけていた計画はたちまち動き始めた。法医学の加賀谷教授門下の俳句誌「やはぎ」のメンバーだった下鳥隆生くんもメンバーに加わってくれた。

タブロイド版4ページの新聞に同窓会の記事と学生の記事をそれぞれ盛り込んだ。黒田、末吉、下鳥、私、同級生四人がそれぞれ一面ずつを担当し、書き上げた原稿を持って飯田橋の薄汚れた印刷所の屋根裏部屋に缶詰になった。まだワープロもPCもない時代だ。植字職人が拾って長方形の木箱に組み込んだ棒組みという活字のブロックを紙面のレイアウトに合わせて割り付けていく。インクと油にまみれる仕事だったが楽しい作業だった。

第1外科の河合教授と解剖学の森田教授の定年退官の記事をトップに据え、ゐのはな同窓会報1号は世に出た。

創刊から何号かまでは私達4人が編集・発行したが、その後は次々と後輩が引き継いでくれた。あれから歳月はどんどん流れ、その中でいろいろな時代があった。全国的な学生運動の嵐に翻弄され同窓会の視点と学生編集部の視点にズレが出て休刊したこともあったが、会報はさまざまな担い手の努力によってその火を灯し続けた。作り手、内容、形式は創刊の頃から少しずつ変遷してきたが「ゐのはな同窓会報」は現在も全国の同窓会員に母校の情報を発信し続けている。

松本 生